

「期待する」が選択する「の」、「こと」

渡 辺 ゆかり

1. 始めに

補文標識「の」、「こと」の意味的な相違を明らかにしようとした基礎的且つ代表的な研究に、Kuno (1973), Josephs (1976), Akatsuka (1978) がある。

これらの先行研究では、述語動詞の意味の相違、及び、主体の認識^{ish}の在り方の相違から「の」、「こと」の使い分けを説明しようとしており、認識的な側面を考慮しなければ説明することのできない例の一つとして「期待する」という動詞の取りうる「の」、「こと」の使い分けについて取り上げている。

しかし、稿者が、渡辺 (1996) で指摘したように、これらの先行研究における説明に合致しない表現例も存在する。

また、稿者は、渡辺 (1996) において、認知論的な枠組みを通して、「期待する」という動詞が取りうる「の」、「こと」の使い分けの分析を試みたが、渡辺 (1996) の説明に合致しない表現例も存在する。

本稿では、渡辺 (1996) で提示した枠組み、並びに、仮説に一部修正を加えたものに従いつつ、「期待する」という動詞の意味構造を言語事実に適合するような形で明確に記述することによって、「の」、「こと」の使い分けを解明することを目的とする。

2. 先行研究

筆者の管見する限りでは、補文標識の「の」、「こと」の意味的な相違を明らかにしようとした研究の中で最も基礎的且つ代表的であるとみなされるものとして Kuno があげられるが、Kuno は「の」、「こと」の相違について次のように述べている。

「の」は五感（または六感）によって直接知覚される具体的な行動、状態、

出来事を表し、「こと」はより抽象的な概念を表す。(Kuno 1973: 221)

そして、「見る」、「聞く」等の動詞が「の」しか取らないのは、具体的な出来事は見たり、聞いたりすることができるが、抽象的概念は見たり聞いたりすることができないからであり、「命令」を表す動詞が「こと」しか取らないのは、命じられる行動というのはまだ五感によって知覚されるはずがないからであると具体例をあげながら記述している。

しかし、次の(1), (2)のように、「知る」という動詞は、補文が直接五感で知覚することの不可能な事態を表している場合にも「の」を選択する。

- (1) オゾン層が破壊されつつある ノ／コト を知った。
- (2) サンタクロースが本当は存在しない ノ／コト を知った。

また、Kuno, Josephs では、「命じる」という動詞は「こと」しか取らないとされているが、渡辺 (1995)^{it2}、渡辺 (1996) では、「命じる」という動詞が「の」も許容する表現例が提示されている。

さらに、Kuno は、「期待する」という動詞が「の」を取る場合と「こと」を取る場合の相違については、認知的な側面を考慮し、「の」を取った場合の方が「こと」を取った場合よりも補文の表す事態が成立することに対する主語の確信が強いとしている。

Akatsuka (1978: 186) も次の(3)において「の」を取った場合は「こと」を取った場合よりも「ジョンが来る」ことに対する主語の確信が強いことを表すとし、Kuno と同様の見解を示している。

- (3) (=Akatsuka's (14))

私は ジョンが来る の／こと を期待した。

しかし、(3)に確信の弱いことを表す「半信半疑ながらも」という語句が現れている次の(4)においても「の」は「こと」と同程度に許容される。

- (4) 私は 半信半疑ながらも ジョンが来る ノ／コト を期待した。

逆に、確信が強いことを表す「強く確信した」という動詞を(3)の「期待した」の代わりに用いた次の(5)においては、動詞そのものが確信の強いことを表しているにもかかわらず、「こと」は「の」と同程度に許容される。

(5) 私は ジョンが来る ノ／コト を強く確信した。

従って、「期待する」という動詞が取りうる「の」、「こと」の使い分けが、補文の表す事態の成立に対する主語の確信の強弱からは説明できないことは、明らかである。

一方, Josephs (1976: 336-337) は、「直接 (direct)」、「間接 (indirect)」という概念を「の」、「こと」に結びつけ、次の(6)では、補文が完成するまでに長い時間を要する比較的抽象的な過程、時間的に遠い隔たりがあって五感で直接的に知覚することができない出来事を表すので、「間接」を示す「こと」の方が好ましいとしている。

(6) (=Josephs's (32))

私は、彼女が将来偉い学者になる ?の／こと を期待していた。

Josephs の説明に合致する表現例には、以下の(7)–(14)がある。(7)–(14)においては、補文は、たとえ成立しても、主体が物理的に、或いは、状況的に五感で知覚することの不可能な事態を表しており、「の」の許容度は(6)よりも低い。

(7) 太郎がその事実を知っている ??ノ／コト を期待した。

(8) 太郎が間違いに気づいている ??ノ／コト を期待した。

(9) 太郎が来ない ??ノ／コト を期待した。

(10) 君が弱音をはかない ??ノ／コト を期待した。

(11) 受講生が少ない ??ノ／コト を期待した。

(12) 担当の先生がやさしい ??ノ／コト を期待した。

(13) 今頃お見合いがうまくいっている ??ノ／コト を期待した。

(14) 花子が太郎を説得している ??ノ／コト を期待した。

(7), (8)の場合、補文は太郎の認知状態を表しているが、人間の認知状態は、物理的に五感で知覚できるものではない。

(9), (10)の場合、補文の表す事態は、「太郎が来る」、「君が弱音をはく」といった事態の「実在」が五感で知覚されなかったという事実に基づき、立証される事態であって、やはり、物理的に五感で知覚できる事態であるとみなすことはできない。^{注3}

(11), (12)の場合、補文は、主体の価値判断の有り様を表しているが、価値判断の有り様は、物理的に五感で知覚できるものではない。

(13), (14)の場合、補文の表す事態がたとえ成立しても、主体は、その「实在」を五感で知覚することができるような状況下にはいないものと想定される。

従って、(7)–(14)を見る限りにおいては、「の」は「直接」を示し、「こと」は「間接」を示すとする Josephs の規定の仕方は、妥当であるかに見える。

しかし、補文が、成立すれば、主体が五感で直接的に知覚することになる事態を表している次の(15)–(17)では、「直接」を示すとされる「の」だけではなく、「間接」を示すとされる「こと」も全く許容される。

(15) 太郎が荷物を持ってくれる ノ/コト を期待した。

(16) 太郎がこっちを振り向く ノ/コト を期待した。

(17) 太郎が姿を現す ノ/コト を期待した。

従って、Josephs における、補文が五感で直接的に知覚することのできない事態を表す場合は「こと」の方が好ましいという指摘は、ほぼ妥当であるとみなすことができるが、「の」は「直接」を示し、「こと」は「間接」を示すという規定の仕方は、妥当ではないということができる。

以上の考察より、Kuno, Akatsuka, Josephs における「の」、「こと」の意味規定の仕方に問題があることは、明らかである。

そこで、稿者は、渡辺 (1996) で、認知的な枠組みの基に、「の」は、「实在」を指示し、「こと」は、「イメージ」を指示するという仮説を設定し、この仮説を用いて「の」、「こと」の使い分けの説明を試みた。

そして、「期待する」という動詞は、ある事態 X は、「(A) 主体にとって好ましい事態」であり、尚且つ、「(B) 実現する可能性はあるが『实在』が確定しているわけではない」ので、「(C) X の実現を願う」という心的行為、及び、(C)であるが故に、「(D) X の『实在』が五感で知覚される時を待つ」という行為を表すとし、(C)の行為に焦点が置かれた場合は、「イメージ」を指示する「こと」の選択が優先され、(D)の行為に焦点が置かれた場合は、「实在」を指示する「の」の選択が優先されるとした。

また、次の(18)において「の」の選択が制約されるのは、補文が、時間的な幅を持った事態を表しているので、「期待する」という動詞の意味として、一時点に

おける事態の「実在」を対象とする(D)の行為の意味に焦点を置くことができないからであるとした。

(18) (=渡辺(1996)の(6))

花子は、太郎が来ない ??の／こと を期待していた。

しかし、次の(19)における「期待する」という動詞は、渡辺(1996)に従えば、「の」が選択された場合、(D)の行為の意味に焦点が置かれることになるが、補文が、未来の事態ではなく、生起中の事態を表しているので、(D)のような行為を表しているとはみなしがたい。また、(20)は、補文が時間的に幅を持った事態を表しており、渡辺(1996)に従えば、一時点における事態の「実在」を対象とする(D)の行為の意味に焦点が置くことができず、「の」の選択が制約されるはずであるのに、「の」は全く許容される。

(19) 冷蔵庫の中にビールが冷えている ノ／コト を期待して、冷蔵庫を開けた。

(20) 昼まで天気もつ ノ／コト を期待した。

このような言語事実より、渡辺(1996)においては、枠組み、並びに、仮説に問題があるというよりは、むしろ、「期待する」という動詞の意味分析の仕方に問題があるものと見てとることができる。

従って、本稿では、基本的に、渡辺(1996)の枠組み、並びに、仮説に従いつつ、「期待する」という動詞の意味構造を言語事実に適合するような形でより明確に記述することによって、「の」、「こと」の使い分けを説明していくこととする。

3. 認知論的枠組み、及び、「の」、「こと」の使い分けに関する仮説

稿者は、渡辺(1996)において、補文標識「の」、「こと」の使い分けに関する仮説を設定するに際し、まず、補文標識としての資格を持たない「の」、「こと」について分析を試みた。その結果、「の」は、何らかの世界の「実在」を指示し、「こと」は、認知者の脳裏にある「心的表象」を指示するという仮説を提示するに至った。

そして、「心的表象」は、認知心理学において「イメージ」と呼ばれているものに相当するとし、また、それは、認知者が自らの「主観」^{注4}を基に世界を規定し

た結果、認知者の脳裏に形成され、そこには、世界の有り様に関する認知者の「主観」が映し出されているとした。

さらに、渡辺（1996）では、「認知者の『主観』と認知様式との関係」を稿者の日常経験に照らし合わせながら概観した後、仮説の前提となる「認知論的な枠組み」、及び、「補文標識『の』、『こと』の使い分けに関する仮説」を提示した。

本稿では、基本的に、渡辺（1996）の枠組み、並びに、仮説に従うことはすでに述べたが、以下、この「認知者の『主観』と認知様式との関係」、「仮説の前提となる認知論的な枠組み」、「補文標識『の』、『こと』の使い分けに関する仮説」について、渡辺（1996）を部分的に修正しながら見ていく。^{注5}

3.1. 認知者の「主観」と認知様式との関係

私たちは、現実とされている世界だけでなく、夢や空想の世界等、様々な世界の有り様を自らの「主観」に基づき規定する能力を持っている。

例えば、私は、ある事態を目のあたりにしながら、その事態を「妹はテレビを見ており、母はお茶を飲んでおり、…」といったふうに規定していくこともできるし、また自分の望む将来を想像して「発明家になり、一大発明をして、億万長者になって…」といったふうに規定していくこともできる。

しかし、いずれの場合においても、これらの規定が私の「主観」に基づいていることに変わりはない。

何故なら、私が目のあたりにした事態が、実際のところ「妹はファミコンゲームで遊んでおり、母はコーヒーを飲んでおり、…」という事態であったにもかかわらず、私は、「今はちょうど妹の好きな番組が放映されている時間だ」、「母はしょっちゅうお茶を飲んでいる」といった「所信」を拠る所に、よく確かめもせず、先のような規定を行ってしまった可能性も全く無いとはいきれないであろうし、自分の望む将来についての規定の仕方というのは、認知者の「価値観」が変われば、変わってしまうものであるからである。

また、規定される世界というのは、規定を望む者の「意図」や「関心」によって焦点化されるものと考えられる。

例えば、私が今目の前にいる友人Aに「昨日の晩は何してたの。」と尋ねたとする。その時、私が規定を望んでいる世界は私の「関心」により、「昨日の晩の友人Aの行動の有り様」に焦点が絞られているとみなすことができる。

さらに、私たちは規定された、或いは、規定される世界の「実在」を自らの「信念」に基づき確定的であるとみなしたり、場合によっては、「意図的」に、或いは、「故意」に確定的であると見なしたりする。

例えば、目の前にあるりんごを見て「りんごがあるから食べよう。」と言った場合は、話者はりんごの「実在」を自らの「信念」に基づき確定的であるとみなしている。一方、何もないテーブルを指し「ここにりんごがあったら、食べずにはいられないだろう。」と言った場合は、話者はりんごの「実在」を「故意」に確定的であるとみなし、その場合の結果を予測しているものとみてよい。

3.2. 仮説

以上、認知者の「主観」と認知様式との関係を見てきたが、このような認知者の「主観」と認知様式との関係性から、本稿においては、以下のような認知論的枠組みを分析の基盤に置く。

「仮説の前提となる認知論的枠組み」

- (A) 世界の有り様は、認知者の「主観」に基づいて規定される。
- (B) 規定される世界は、規定を望む者の「意図」や「関心」によって焦点化される。
- (C) 世界の「実在」は、認知者の「信念」に基づいて確定的であるとみなされたり、「意図的」に、或いは、「故意」に確定的であるとみなされたりする。

そして、「の」、「こと」の使い分けを説明するに際し、上記の枠組みを前提とする以下のような仮説を採用することとする。

「補文標識『の』、『こと』の使い分けに関する仮説」

「の」は、認知者によって規定された、或いは、規定される世界の「実在」を指示する。

「こと」は、ある世界の有り様について認知者が所有する「イメージ」を指示する。

4. ヲ格補文を取る場合の「期待する」という動詞の意味構造

2節では、たとえ成立しても、主体が物理的に、或いは、状況的に五感で知覚

することのできない事態を表す補文を取る(7)–(14)において「の」の選択が制約されることを見た。

また、3節では、「の」は、「実在」を指示し、「こと」は、「イメージ」を指示するという仮説を提示した。

然らば、何故、補文が、成立しても、主体が物理的に、或いは、状況的に五感で知覚することのできない事態を表す場合に、「イメージ」を指示するとされる「こと」が優先的に選択され、「実在」を指示するとされる「の」の選択が制約されるのであろうか。

また、何故、補文が、成立すれば、主体が物理的にも状況的にも五感で知覚することの可能な事態を表す場合に、「実在」を指示するとされる「の」と「イメージ」を指示するとされる「こと」のいずれも全く許容されるのであろうか。

ここでは、「の」、「こと」の使い分けに大きく関与しているものと考えられる「期待する」という動詞の意味構造を言語事実に照らし合わせながら分析していく。

「期待する」という動詞の表す心的行為は、「(A) 補文の表す事態は、主体にとって好ましい事態である」並びに「(B) 補文の表す事態は、成立の可能性は高い」という主体の認識を前提としている。すなわち、「期待する」という動詞の表す心的行為は、主体の(A)、(B)の認識に動機付けられている。

その証拠に、「後件」の行為が「前件」の認識に動機付けられていることを表す「(前件) ので (後件)」という構文において、「前件」に(A)或いは(B)の認識を表す文が現れ、「後件」に「期待する」という動詞を述語とする文が現れている次の(21a)、(22a)は、意味的に容認可能な表現として成立するが、「前件」に(A)或いは(B)と相反する認識を表す文が現れている(21b)、(22b)は、意味的に容認可能な表現としては成立しない。

- (21) a. 彼の成功は私にとっても好ましいことであるので、私は彼が成功する
ノ／コト を期待することにした。
b. *彼の成功は私にとっては好ましくないことであるので、私は彼が成功する
ノ／コト を期待することにした。
- (22) a. 彼なら成功するかもしれないので、私は 彼が成功する ノ／コト
を期待することにした。
b. *彼なら成功するはずがないので、私は 彼が成功する ノ／コト

を期待することにした。

また、「前件」の認識と(A)の認識との関係付けが比較的容易な次の⑭は、意味的に容認可能な表現として成立するが、「前件」の認識と(A)の認識との関連付けが極めて困難な⑮は、容認性が極めて低い。

⑭ 彼は、成功すると機嫌がいいので、私は 彼の成功する ノ／コト を期待することにした。

⑮ *彼は、自分の成功をすぐ自慢したがるので、私は 彼が成功する ノ／コト を期待することにした。

このような言語事実より、「期待する」という動詞の表す心的行為が(A)、(B)の認識に動機づけられていることは明らかである。

そして、「期待する」という動詞は、(A)、(B)の認識に動機付けられた「(C) 補文の表す事態の成立を願望する」という行為、すなわち、次のイの行為を表しているものと考えられる。

イ： [(A)並びに(B)。しかし、(B)すなわち(B')。故に、(C)。]^{注6}

(A) 補文の表す事態は、主体にとって好ましい事態である

(B) 補文の表す事態は、成立する可能性は高い → (B')^{注7}

(B) 補文の表す事態の成立は、可能性はあっても確定的であるとみなすことはできない

(C) 補文の表す事態の成立を願望する

その証拠に、「後件」の行為が「前件」の行為に動機付けられていることを表す「(前件)て(後件)」という構文において、「前件」に「期待する」という動詞を述語とする文が現れ、「後件」にイの行為に動機付けられる行為を表す文が現れている次の⑯は、意味的に容認可能な表現として成立するが、「後件」にイと相反する行為に動機付けられる行為を表す文が現れている⑰は、意味的に容認可能な表現としては成立しない。

⑯ 太郎が優勝する ノ／コト を期待して、太郎を応援した。

⑰ *太郎が優勝する ノ／コト を期待して、太郎以外の対戦者を応援した。

このような言語事実より、「期待する」という動詞は、イの行為を表すのに用い

られると見なすことができるが、イにおける(C)の願望は、補文の表す事態の成立が確定的であるとみなされるまで、満たされない。換言すれば、「(D) (C)の願望は、補文の表す事態の成立が確定的であるとみなされれば、満たされる」ことになる。

そして、「(E) 補文の表す事態の成立は、補文の表す事態の『実在』が五感で知覚されれば、確定的であるとみなされる」ことから、「(F) (C)の願望は、補文の表す事態の『実在』が五感で知覚されれば、満たされる」ということができる。

従って、「(G) 補文の表す事態は、成立すれば、主体がその『実在』を物理的にも状況的にも五感で知覚することの可能な事態である」ならば、主体は、(C)の願望を満たすために、「(H) 補文の表す事態の『実在』を五感で知覚しようと試みる」という行為を選択する可能性は極めて高い。

そして、「期待する」という動詞は、このような行為、すなわち、次のロの行為を表す場合にも用いられる。

ロ： [イではあるが、(D)並びに(E)。つまり、イではあるが(F)。従って、(G)ならば、(C)の願望を満たすために、(H)。]

(D) 補文の表す事態の成立が確定的であるとみなされれば、(D)の願望は満たされる

(E) 補文の表す事態の「実在」を五感で知覚すれば、補文の表す事態の成立は確定的であるとみなされる

(F) 補文の表す事態の「実在」を五感で知覚すれば、(C)の願望は満たされる

(G) 補文の表す事態は、成立すれば、主体がその「実在」を物理的にも状況的にも五感で知覚することの可能な事態である

(H) 補文の表す事態の「実在」を五感で知覚しようと試みる

その証拠に、「後件」の行為が「前件」の行為に動機付けられていることを表す「(前件)て(後件)」という構文において、「前件」に「期待する」という動詞を述語とする文が現れ、「後件」にロの行為に動機付けられる行為を表す文が現れている次の(27a)、(28a)は、意味的に容認可能な表現として成立するが、「後件」にロの行為に動機付けられない行為を表す文が現れている(27b)、(28b)は、意味的に容認可能な表現としては成立しない。

- (27) a. 彼が帰る ノ／コト を期待して、彼を待っていた。
 b. *彼が帰る ノ／コト を期待して、彼を待たなかった。
- (28) a. 宝くじが当たる ノ／コト を期待して、宝くじを買った。
 b. *宝くじが当たる ノ／コト を期待して、宝くじを買うのをやめた。

また、「期待する」という動詞の表す行為が(A)、(B)の認識に動機付けられていることはすでに述べたが、これらの認識に「(I) 補文の表す事態が成立するなら、主体は、補文の表す事態の『实在』を五感で知覚することになる→(G)」のような認識が加わった場合、主体は、自らの行動を決定するに際し、「(J) 補文の表す事態の『实在』を五感で知覚できるものと想定する」可能性も極めて高い。

そして、「期待する」という動詞は、このような行為、すなわち、次のハの行為を表す場合にも、用いられる。

ハ： [(A)並びに(B)並びに(I)ならば、自らの行動を決定するに際し(J)。]

- (I) 補文の表す事態が成立するなら、主体は、補文の表す事態の「实在」を五感で知覚することになる→(G)
(J) 補文の表す事態の「实在」を五感で知覚できるものと想定する

その証拠に、「後件」の行為が「前件」の行為に動機付けられていることを表す「(前件)て(後件)」という構文において、「前件」に「期待する」という動詞を述語とする文が現れ、「後件」にハの行為に動機づけられる行為を表す文が現れている次の(29a)、(30a)は、意味的に容認可能な表現として成立するが、「後件」にハの行為に動機づけることが極めて困難な行為を表す文が現れている(29b)、(30b)は、容認性が極めて低い。¹⁸

- (29) a. 彼が帰る ノ／コト を期待して、料理をとっておいだ。
 b. *彼が帰る ノ／コト を期待して、戸締まりをした。
- (30) a. 宝くじが当たる ノ／コト を期待して、賞金の使い道をノートに書き留めておいだ。
 b. *宝くじが当たる ノ／コト を期待して、宝くじを捨てた。

以上の考察により、ヲ格補文を取る場合の「期待する」という動詞は、イ、ロ、ハのような行為を表す場合に用いられるとすることができる。

5. 「期待する」という動詞の意味構造と「の」、「こと」との関係

4節では、ヲ格補文を取る場合の「期待する」という動詞の意味として、イ、ロ、ハの意味が抽出された。

このうち、ロ、ハは、4節の意味記述に示されるように、補文の表す事態の「実在」に対して遂行される行為を表している。

従って、ロ、ハの意味に焦点が置かれた場合は、「実在」を指示するとされる「の」が優先的に選択されることとなる。

然らば、イが表す行為は、如何なる対象に対して遂行されるのであろうか。

稿者は、渡辺(1996: 39)において、『喜ぶ』という心的行為は、脳裏に浮かんだ『イメージ』に対して遂行されているとみなすこともできるし、疑い得ないものとして確定した世界の『実在』に対して遂行されているとみなすこともできる」と述べた。⁷⁹

しかし、同じ心的行為であっても、「期待する」という動詞の表すイのような心的行為の場合は、(B')のような認識に直接的に動機付けられているので、「実在」に対して遂行される行為であるとはみなしがたい。その結果、イの心的行為は、「イメージ」を対象とする次の(31)のような行為を表しているものと解釈される。

- (31) 補文の表す事態の「イメージ」に対して、「イメージ」に表象されている事態が成立してほしいという願望を抱く

従って、イの行為に焦点が置かれた場合は、「イメージ」を指示するとされる「こと」が優先的に選択されることとなる。

以上のような、「期待する」という動詞のイ、ロ、ハの意味と「の」、「こと」との関係から、「の」の選択が制約される(7)–(14)を分析すると次のようになる。

(7)–(14)では、補文が、成立しても、主体がその「実在」を物理的に、或いは、状況的に五感で知覚することのできない事態を表しているので、「期待する」という動詞の意味として、ロの(G)、及び、ハの(I)の条件を満たしておらず、「の」の選択が優先されるロの意味と、同じく「の」の選択が優先されるハの意味に焦点を置くことができない。従って、必然的に「こと」の選択が優先されるイの意味に焦点が置かれることとなり、「の」の選択は制約され、「こと」の選択が優先されることとなる。

一方、補文が、成立すれば、主体がその「実在」を物理的にも状況的にも五感で知覚することの可能な事態であったり、主体が五感で知覚することになる事態である場合は、「こと」が優先的に選択されるイの意味だけでなく、「の」の選択が優先されるロの意味や、同じく「の」の選択が優先されるハの意味に焦点を置くことも可能となる。従って、補文がこのような事態を表す場合は、「の」、「こと」のいずれも全く許容されることとなる。

6. おわりに

以上、「期待する」という動詞の取りうる「の」、「こと」の使い分けを、基本的に渡辺（1996）の枠組み、並びに、仮説に従いつつ、「期待する」という動詞の意味構造を言語事実に適合するような形で明確に記述することによって明らかにしてきた。その結果、基本的には渡辺（1996）に従いつつ渡辺（1996）を部分的に修正した本稿の枠組み、並びに、仮説が、「期待する」という動詞の取りうる「の」、「こと」の使い分けを説明するのに有効であることが示された。

今後は、本稿で採用した枠組み、並びに、仮説が、「知る」、「覚える」、「忘れる」、「思い出す」といった記憶の働きを表す動詞が取りうる「の」、「こと」の使い分けを説明する際にも有効であるか否かを検証していく。

注

- 1) ここでは、「主体」という用語を主語の示す人物という意味に相当するものとして用いる。
- 2) 渡辺（1995）において渡辺（1994）とされている論文は、後に、渡辺（1996）に書き改めたものである。
- 3) 稿者は、渡辺（1996）で、「太郎が来ない」という事態の「実在」は五感で知覚可能であるとした。しかし、「太郎が来るのが見えた。」という表現が成立するのに対し、「太郎が来ないのが見えた。」という表現が成立しないことから、「太郎が来ない」という事態は、物理的に、その「実在」を五感で知覚することの不可能な事態であるとみなすことができる。
- 4) 本稿においては、「主観」という語を「認知者の主体的なものの見方、考え方」という意味で用いているのであって、「認知者の恣意的なものの見方、考え方」という意味で用いているのではない。
- 5) このような仮説が設定されるに至る具体的なプロセスについては、渡辺（1996）を参

照されたい。

- 6) 下線部分は、イ、ロ、ハにおける主たる意味であることを示している。
- 7) 「→」は、「→」の左の記述が「→」の右の記述を含意していることを示す。
- 8) (30b)は、主体は、いったん宝くじを捨てた後、それを拾うと、宝くじが当たると信じていたという特殊な場面を想定すれば、容認可能となる。
- 9) 心的行為を表す動詞が何故、「实在」を指示する「の」及び「イメージ」を指示する「こと」のいずれも選択することが可能であるのかについては、渡辺(1996)を参照されたい。

引用文献・参照文献

- 渡辺ゆかり 1995. 「命令を表す動詞の選択する『の』、『こと』」『ことばの科学』第7号
言語文化部言語文化研究委員会
- 渡辺ゆかり 1996. 「ヲ格補文標識『の』、『こと』の使い分け——仮説設定のプロセスとその意義——」『三重大学日本語学文学』第7号 三重大学日本語学文学会
- Akatsuka, McCawley, N. 1978. "Another look at *no*, *koto*, and *to*: Epistemology and complementizer choice in Japanese." *Problems in Japanese Syntax and Semantics*. Kaitakusha.
- Josephs, S, L. 1976. "Complementation." *Syntax and semantics*, vol. 5. New York Academic press.
- Kuno, S. 1973. *The structure of the Japanese Language*. MIT press.

(わたなべ ゆかり 日本言語文化)